

# 薬物依存 どう回復

薬物依存からの回復をめざす人たち  
の民間入寮施設「びわこダルク」(大津市丸の内町)が、開設6周年を迎えた。20日には市生涯学習センターで入寮者4人が、薬物から抜け出せなかった日々やダルクでの今の生活について語るフォーラムが開かれた。

## びわこダルクが 6周年フォーラム

びわこダルクは02年11月、自らも薬物依存の経験がある猪瀬健夫施設長(44)が開設した。現在、通所者2人を含む男性15人が、薬物依存からの回復をめざすプログラムを実践している。

タケの愛称で呼ばれている男性(24)は、18歳でシンナーを吸い始めた。「薬物には手を出さない」とつもりが、大麻、覚せい剤にのめりこんだ。「頭の中は薬



開設当時について語る猪瀬健夫施設長(大津市生涯学習センター)

## 入寮者「一日一日『止める』を続ける」

「これで薬を使わなくてすむとほっとした。でも、釈放されたその日に大麻、次の日には覚せい剤をやっていた」と、壇上で声を詰まらせた。

びわこダルクに来たのは今年9月。今は、「アルバイトを始めたい」と笑顔を見せる。

板前の経験があり、ダルクで「コック長」とも呼ばれる愛称・ミッキー(33)はこの夏、施設を飛び出したが戻ってきた。「正直、薬物をやめることは無理だと思っ。けれど、一日一日が楽しければ、一日一日止めることが続くんです」と語った。

会場で、4人の体験談を聞いていた名古屋市北区の新井嘉夫さん(66)は6年前、巨男を36歳で亡くした。きつくり腰の治療で処方された薬(リンタン)の依存症になり、自殺したという。「6畳の部屋中に、薬が落ちていた。『絶対やってはいけない』と言っただけでなく、使用した人をどうするのか。犯罪としてだけでなく、命を助けるという視点で、薬物問題への理解が広まってほしい」と話した。



## 薬物の怖さ 体験語る

大津でフォーラム  
びわこダルク6周年

薬物依存症者の民間の活動をねぎらった。リハビリ施設「びわこダルク」(猪瀬健夫施設長)の開設6周年フォーラム「新たな出発」が二十九日、大津市本丸町の市生涯学習センターであった。

日本ダルクの近藤恒夫代表があいさつ。「社会から排除される」と、もつと悪くなり、今度は薬物を広める側に回ってしまう。法律違反だからダメという発想でなく、もつと広い視野で見えてほしい」と訴え、スタッフ

の活動をねぎらった。後にも「善いものや食べるもの、全部盗んで」薬物を手にしたという。今は「働くことに不安を感じる。でも、それは健全な悩みだと思っ」と、生活を取り戻しつつある。

別の男性は少年院や施設に入所するたびに「これでやめられる」と安心した。だが、欲求が激しくなり、出所

↑ 2008. 11. 30 中日新聞記事

